1971年4月23日　第三種郵便物認可　2025年7月1日（毎月1日発行）717号　ISSN　0388-4163

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

7
2025
No.717

特集1　つながろう つなげよう みんなのねがい
全障研全国大会 in 広島

特集2　enjoy water! ～水あそび

全国障害者問題研究会

1　人として　石井奈美
2　【インタビュー】いま語りたい 心の窓を広げて　松林紗希
4　教員のはじめの一歩　小畑耕作
6　心に種をまく　安田菜津紀
7　あなたに届けたいこの一冊　鷹野祐子

みんなのねがい

2025年7月号
No.717

特集①　つながろう つなげよう みんなのねがい 全障研全国大会in広島

10　魅力いっぱい　広島大会
12　学習講座講師からのメッセージ
13　広島大会記念グッズ絶賛発売中！／ぜひ行きんさい！ お勧めの場所
14　この子と歩む　盛次千秋
17　進め！ 推し活道　久我明寛
18　私ときょうだい　川尻亜門

特集②　enjoy water!　～水あそび

21　びしょぬれ大作戦　万野友紀
22　ボランティアから友人♡相棒に！　澤佐景子
23　ステキな夏休みはステキな水場にあり　阿部智子
24　水泳は、魔法のような力を持っている　宮浦めぐみ
25　プールの魔力とみんなの満面の笑み　番場智恵子
26　子どもにとっての水あそび、プール　大宮ともこ

28　**ソーシャルワークってなんだろう？**　木全和巳
32　子どものミカタ　岡田徹也
34　シリーズ 18歳　永田三枝子
36　暮らしの場は今　宮原茂雄
38　実践にいかす障害と医療　安藤佳珠子
40　ニュースナビ　2024年度報酬改定の見直しを求める　小野 浩
42　実践の魅力　山﨑知子
45　全障研の支部ニュース、紹介します　伊津佳恵
46　みんなのひろば
47　息子と歩く　千葉桜 洋
48　BOOK／編集後記
裏表紙　おいしいひととき　九内康夫

表紙のことば

沖縄を撮ろうと本格的に訪れだしたのが2010年。学生時代に旅先で出会った女性たちの目の強さがずっと心に引っかかっていた。

美しい珊瑚の海が広がる絶景の浜で佇む女性に出会った。この先に御嶽（ウタキ）があるらしく、お詣りに来たという。彼女は僕をその御嶽に案内してくれたが、ここから先は気が強いので待っていてとひとり祠（ほこら）の奥へ入っていった。いま思えば、彼女はユタだったのかもしれない。祠から出てきた彼女の車の後部座席に、宿で借りた自転車を無理矢理のっけて、帰り道を一緒にドライブしたことを思い出す。あの時の沖縄の風と彼女の深く澄んだ瞳を忘れない。

あれから15年。今年の夏もまた、愛しき島へ向かう。

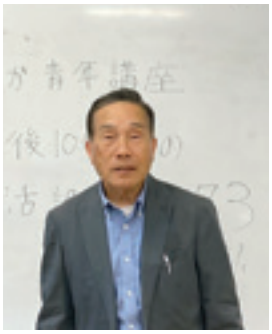
デザイン・イラスト
うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙=土佐和史

とさ　かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」（CITYRAT press）「北関東」「路地裏に咲いた花」（いずれもBUFFALO PRESS）がある。

教員のはじめの一歩

第４回
子どもの様子を語り合おう



全障研和歌山支部
小畑耕作

こばた　こうさく／1951 年生まれ。特別支援学校に長年勤める。退職後、元大和大学教授、現在太成学院大学非常勤講師、教員養成課程担当。

イラスト　勝倉大和

新学期が始まって２ヵ月余り経ちました。少し立ち止まって子ども一人ひとりの様子を振り返ってみましょう。学校に来るのを楽しみにしているでしょうか。どの子にもクラスが安心・安全で心地よい居場所であり、自分の気持ちをわかってくれるかけがえのない人の存在ができていますか。

教師自身にゆとりがないと子どもの内面（気持ち）をとらえることが困難になります。また、教師は、ついつい子どもの今もってる力の次の力（縦の発達）の獲得に迫ってしまいます。しかし、子どもは今もってる力を発揮したいのです。集団の中で、発揮できる場面を多くつくりましょう。いろいろな場面でその力を発揮（横の発達）していきます。また、友だちの活動を見て自分もできるようになりたい（憧れ）と思います。自ら挑戦するように仕掛けることを心がけましょう。

子ども理解の共有の場を

下校の子どもたちを見送った後、教室などの清掃を終え職員室や教室で短時間の休憩に入ります。以前は、お茶などを飲みながら、ゆったりと今日の子どもの様子を語ったものでした。しかし、今は

◆小畑さんの連載は今月号でおわりです。第５～８回は木澤愛子さん（特別支援学校教員）の連載です

広島大会記念グッズ 絶賛販売中！

今回はトートバッグ、クリアファイル、Tシャツを製作しました。どこで販売しても「かわいいね」という声をかけていただき、うれしい限りです。

この物価高騰の時代に、Tシャツ1500円、トートバッグ1000円、クリアファイル100円はお求めやすい価格ではないでしょうか。大会でも販売予定です。

ぜひお買い求めください。

Tシャツ　¥1500（税込）　※ドライ速乾タイプ
サイズ（男女兼用）：130・S・M・L・3L
素材：ポリエステル100%　※色とサイズのご希望をお知らせください。

コヨーテ

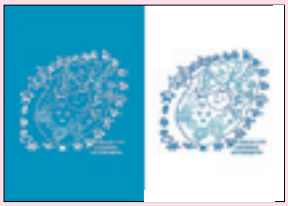
ホワイト

グレー

ラベンダー

トートバッグ
¥1000（税込）

クリアファイル
1枚¥100（税込）



この収益は、広島県内参加者の参加費補助に使わせていただきます
○購入方法：　zensyoken.hiroshima@gmail.com　（全障研広島県支部）にお申込みください
・請求書に振り込み先のご案内を同封します
・発送代、振り込み手数料についてはご負担願います

ぜひ行きんさい！　お勧めの場所

全国大会の開催時期、なんと言ってもお勧めの場所は広島駅ビルです。「minamoa（ミナモア）」として3月にオープンしたばかりです。また、広島市内を走る「チンチン電車」で親しまれている路面電車が、広島駅の改札口前に乗り入れることになり、乗り換えが大変楽になります。開業は8月3日です。ぜひ広島駅であらたな風景を楽しんでください。お待ちしています！（大会準備事務局　久保洋子）

水中輪くぐりに挑戦！

特集②

enjoy water!

水　あ　そ　び

障害のあるなしに関わらず、子どもたちは水あそびが大好きです。障害のある子どもや仲間にとっての水あそびや水泳は、安心安全な環境を整えることで、気持ちを開放して、思いっきり自己表現ができる絶好のとりくみといえます。学校や福祉現場、また余暇活動の場でも、水泳や水あそびを愛してやまない人々によって、さまざまな活動や実践がつくられています。夏に向けて、水の魅力を語り合いませんか？

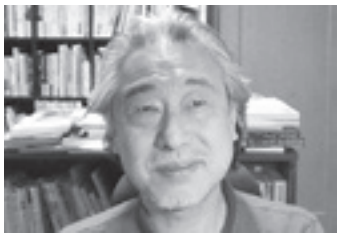
「きゃあ、つめた〜い！」

絵　奈良教育大学付属小学校特別支援学級の子どもたち

ソーシャルワークってなんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、
かけがえのない生命を共に輝かせるために

第4回
「しょうがい」について考える



日本福祉大学
木全和巳

きまた　かずみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』（クリエイツかもがわ）など

「障害って呼ぶな！」

ある当事者青年の叫びです。もう少し穏やかに「わたしは精神障害者ではありません」と語られる統合失調症と生きる女性の言葉も聞いたことがあります。「発達障害」（現在は「神経発達症」です）と診断された子どもの母親は「うちの子は障害児ではありません」と話されました。支援者からの「あの人は障害の受容ができていない」とか、教師からも「あのお父さんは子どもの障害の受容ができていないから」と、訳知り顔で批判めいた言葉もよく聞くことがあります。「ぼくって障害者？」という自問の問いかけも青年たちから時々投げかけられます。別の青年は「悪口」と答えてくれました。

「障害」とは何か？　という理解は、当事者自身が生きていく過程において、それぞれの節目において、自分の「障害」をどのように受けとめていくのかという時に、大きな影響を与えます。こうした受けとめは、当事者だけではなく、ともに生きている家族にとっても大切な課題となります。そして、こうした当事者や家族を専門職として支える医師、看護師、保育士、教師、ソーシャルワーカーが、支援実践をする時にも、対象としての「障害」の理解は、重要な視点となるでしょう。

大学の教員を続けていると、学生たちからも率直に「障害って何ですか？」とよく質問されます。身の回りのさまざまな機能障害のある当事者との出会いがない、出会ってもその出会いやつながりが、よい印象ではなかった、つらかったと

いうことがあると、「障害」に関する意識は、否定的なものとなりがちです。ある学生は、そもそも「障害」という言葉があること自体悪いことであり「差別」であるなどという感想を書いてきます。「大切な質問ですね。あなたはどう考えています?」と「対話」をしながら、相手の考えを聞きながら整理しつつ、ICFと「人権モデル」の視点から「私」のいまのところの考えを伝えています。

英語の「ディスアビリティ(disability)」の訳語として

困った時に手がかりになるのが、やはり2006年に採択された障害者権利条約です。

前文(e)において、「障害(disability)が形成途上にある概念であること、また、障害が機能障害(impairment)のある人と態度及び環境に関する障壁(barriers)との相互作用であって、機能障害のある人が他の者との平等を基礎として社会に完全かつ効果的に参加することを妨げるものから生ずることを認め」と確認しつつ、第1条の定義において、「障害のある人には、長期の身体的、精神的、知的又は感覚的な機能障害のある人を含む。これらの機能障害は、種々の障壁と相互に作用することにより、機能障害のある人が他の者との平等を基礎として社会に完全かつ効果的に参加することを妨げることがある」と定義しています。「医学モデル」と「社会モデル」を統合した「人権モデル」の理解です。

このように権利条約では、障害(disability)と機能障害(impairment)の概念を明確に区別しています。けれども、日本語では、たとえば、視覚障害(visual impairment)、聴覚障害(hearing impairment)の場合、見えない見えにくい、聞こえない聞こえにくいという生物学的な機能の不全の意味でのimpairmentも、点字などの情報保障や補助犬の利用という制限による他の者との平等を基礎として社会に完全かつ効果的に参加することを妨げることであるdisabilityも、どちらにも「障害」という訳語を当てています。車いすユーザーにおける段差などのバリア(barriers)はここでは障壁と訳していますが、障害や障碍と訳され、表記されることもあります。

一貫性がない日本の定義と理解

2011年に改正された障害者基本法第2条では、「身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害(以下「障害」と総称する。)がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう」と定義されています。法務省が運営する日本法令外国語訳データベースシステムでは、障害はすべてdisabilityとされていて、impairment、disorderも使われていません。少なくとも「心身の機能の障害」は障害者権利条約と対応させて、impairmentとすべきであり、「(以下「障害」と総称する。)」は、「(「以下「機能(形態)障害」と総称する。)」でなければ、理解に一貫性がありません。

日本語では、「発達障害」という用語のもとの英語は、

第4回
つながる

この連載では、さまざまな実践者がそれぞれの実践を通して、子どもの発達や魅力について語ります。

滋賀　特別支援学校教員　**岡田徹也**

◆いつもとはちがう世界

秋、文化祭『10ぴきのかえる』のとりくみが始まりました。チアキくんの舞台練習は、教室と同じようにはなかなかいきませんでした。体育館には喜んで入りましたが、出番を待つ間に不安になってしまったようです。私の手をぎゅっと握って、身体も固くなっていました。

「やらなくてもいいよ」私の言葉を聞くと、チアキくんはようやくひょいと立ち上がり、私と手をつないで舞台に登ることができました。そして、舞台幕に頭まですっぽり包まったのでした。友だちの雰囲気を感じながら、どうするか、自分で決めたいという思いが伝わってきました。

劇あそびが始まりました。チアキくんは幕の中。綱引きでは「やられた！」とカエルチームが負けて、にぎやかにひっくりかえっています。2回目の綱引きでは、チアキくんは顔を舞台幕からひょっこり出しました。そして、3回目。ついにチアキくんは幕から出て、綱を持ちました。舞台の上で教室と同じように楽しむことができました。

チアキくんは文化祭の雰囲気に不安を感じる一方で、劇あそびのおもしろさに気がつき、「やりたいけれどドキドキする」と気持ちを揺らしているようでした。舞台幕にいったんは包まるのですが、自分で決めて、活動に参加するようになりました。幕に包まる部分が小さく、出るまでの時間が短くなっていきました。気持ちを揺らしながら自分で決める時間の中で、「好き」ややってみたい気持ちを膨らませていっているようでした。そして、当日にははじめて衣装を着て、友だちと一緒に活動を楽しむ姿につながりました。

このごろ、文化祭の劇活動は騒がしさや緊張感など、子どもへの負担が大きく、やめた方がいいという声を聞きます。私は、文化祭は文化を子どもたちに手渡す大切な行事だと考えています。また、子どもたちにとっては、舞台に上がることでの手に汗握る緊張や心が揺れる経験を、友だちや教師と一緒に共有する時間が必要だと考えています。そのために、私たちは子どもたちの不安を解消するための手立てを教師集団で考え、実践することが必要です。

文化祭の後、教室で劇あそび『10匹のかえる』をしていたときです。いつもは

精神障害の理解と支援④
家族だけで抱え込む支援の限界と現実的な見通し

日本福祉大学
安藤佳珠子

あんどう　かずこ／専門は社会福祉学。ひきこもりやその家族の活動を支援。精神科病院等でソーシャルワーカーとして勤め、現在は日本福祉大学の社会福祉学部社会福祉学科講師。論文「不登校経験があるひきこもりの若者の葛藤する機会を保障するソーシャルワーク：発達集団が生み出す関係性のなかでの自立」等。

近年、障害福祉の事業所では、発達障害があり、ひきこもっている方の相談が増加しています。こうした相談の多くは、家族のみが支援機関とつながり、本人との直接的な接点がもてない状況にあります。家族は支援の必要性を理解しながらも、現在の状況をなんとか維持してきた経験から、変化よりも現状維持を選択してしまう傾向が見られます。

現状維持を選択する家族の心理

ひきこもり支援において、本人が安心してひきこもることができる場の確保は極めて重要です。支援者は家族に対して「本人を信じて待ちましょう」とお伝えすることが多く、本人の自室や自宅が安心・安全な場となるよう働きかけます。本人は安心・安全な場でひきこもる中でエネルギーを貯めていけると、やがて動き出していきます。

しかし、現実には5年、10年経ってもひきこもり状態が継続する方も多数いらっしゃいます。ひきこもり支援において「信じて待つ」ことは基本的な姿勢ですが、ひきこもり生活が長期化することによって、その生活が本人や家族にとっての「普通」となり、「このままでいい」という思いが定着します。結果として、動き出すタイミングを見い出すことが困難になります。

次に本人だけでなく、家族も「このままでいい」と思うようになる背景について考えていきます。本人がひきこもると、家庭内では日常的に葛藤が生じます。家庭内での葛藤は本人と家族の双方を疲弊させるため、葛藤が一旦落ち着くと、同様の状況を回避したいという気持ちが強くなります。この結果、現状を維持しようとする力が強まります。特に本人の暴言や暴力がある場合、家族には本人の刺激となるような行動を避けたいという心理も働き、より慎重な対応を選択するようになります。

長期化するひきこもり生活が家族に与える影響

現状維持によってひきこもり生活が長期化する過程で、家族自身が自分の人生を主体的に生きることが困難になる場合があります。「本人が苦しんでいるのに、自分が楽しんではいけない」という罪悪感から、外出や趣味活動を控える家族は少なくありません。また、当事者が家にいやすい環境を維持するために、家族が

2024年度報酬改定と「ただちに見直しを求める」3,144団体の声

生活介護とGHの基本報酬は大幅減収

2024年にきょうされんが実施し3,117ヵ所の回答を得た「2024年度の報酬（公的給付費）改定の影響調査」では、時間刻み報酬が導入された生活介護の763ヵ所中70.5%の538ヵ所の基本報酬が減収でした（**図表１**）。また、入居者４人～５人に支援員１人の規準が廃止されたグループホームでは、534ヵ所中86.9%の464ヵ所の基本報酬が減収という結果でした。

それにたいして（独）福祉医療機構は、生活介護743ヵ所中45.5%が基本報酬と加算を含めて増収（減収は21.3%）、グループホーム476ヵ所中31.3%が基本報酬と加算を含めて増収（減収は27.9%）という調査結果を３月末に公表しました。つまり、後述する「配慮」や加算による増収という評価です。

たしかに生活介護は、厚労省の「配慮」で、前年度平均利用者を少なく算定し「人員配置体制加算」のランクアップによる補填や、実利用時間ではなく、個別支援計画に定めた「標準利用時間」による報酬請求などで減収を免れた事業所は多くあります。しかし厚労省の「配慮」は、制度的保障がなく存続も不透明です。また、利用者の障害の重さや利用実態から、「実利用時間でしか報酬請求できない」生活介護が現実にあるとともに、大分県などでは、「配慮」が認められず実利用時間請求を強いられている地域もあります。そうした生活介護の運営はきわめてきびしい状況にあります。

「加算で評価」は基本報酬の抑制につながる

また厚労省は、「加算で評価」する仕組みを強めていますが、**図表2**にあるように、すべての事業所が多くの加算を取得できているわけではありません。「要件がきびしくて取得できない」、「そもそも専門職や新たな人員の確保が困難な状況で加算を取得できない」などの声が多くあります。とくに本調査で明らかになったことは、利用者の実員規模が小さい事業所ほど、職員数が少なく加算を取得できない実態でした。処遇改善加算も厚労省は「取得率が上がった」と評価しますが、通所では定員20人以下、グループホームでは５人以下の事業所など小規模な事業所や最低賃金が低い地域などは、取得できても「加算率」は低く、就労継続Ａ・Ｂ型、グループホームは、１割を超える事業所が未取得となっています。

就労継続Ｂ型への「時間刻み」を財務省が提案

今回の調査で、就労継続支援Ｂ型は、平均工賃の算定方法の改正で91.2%が基本報酬増収でした。しかし、「基本報酬を平均工賃で評価

田中智子・三木裕和・障害者の暮らしを支えるゼミナール 編著

障害のある人の暮らす権利

ともに歩む支援者たちへ

30万人を超えるグループホームなどで暮らす障害者——

家族からの自立、意思決定、子育て支援、触法、強度行動障害など、8ケース＋コメントで読み解く「暮らしの場の専門性」理論化の到達点。支援の現場での悩みこそが専門性を育む。

A5判286頁 定価2640円（税込）

社会福祉法人 保健福祉の会 パーチェ 著

親子で出会えてよかったと思える療育をめざして

パーチェ20年のあゆみ

療育とのすてきな出会い

2003年、京都で開設した児童発達支援事業所パーチェ。子どもの発達や特性の理解とあそびを重視した療育を行っている。パーチェならではのあそびと事例、制度の変遷をふまえた20年を1冊に。

A5判168頁 定価1650円（税込）

髙橋昭彦 著

うりずんの風に吹かれて

重い病気や障害、医療的ケアのある子どもとともに

外来では立ってお迎え、お見送り、白衣は着ず、何でも相談に応じ、子どもからお年寄りまで診る在宅医の物語。医療的ケア児にかぎらず、困りごとを抱えている子ども、家族に関わる人が増え、社会の理解が深まることを願う。

四六判304頁 定価2420円（税込）

クリエイツかもがわ CREATES KAMOGAWA

〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21 TEL 075(661)5741 FAX 075(693)6605

URL https://www.creates-k.co.jp/ 送料330円（5000円以上当社負担）

@createskamogawa

全国障害者問題研究会 主催

みんなのねがいセミナー

江畑早苗さん

小川真奈美さん

山口歩さん

コーディネーター
白石恵理子さん

7月6日（日）

13:00~15:30 ＠京都教育大学

参加費 1,000円

（『みんなのねがい』まとめ購読担当者様、およびお連れの方1名まで無料）

申込しめきり … **6/30（月）**

お申し込みフォーム

テーマ

今こそ、ねがいを語り合おう

～親の声、聞いてますか？～（仮）

『みんなのねがい』に登場していただいたことのある3人の親に、障害のあるわが子の子育てを振り返っての思いやねがいを率直に語っていただきます。さらに、白石恵理子さん（滋賀大学名誉教授）を交えたトークセッションも予定。

ご家族のお話をじっくりと聞ける貴重な機会。ぜひお誘い合わせのうえ、ご参加ください！

お問い合わせ 全障研事務局 電話 03-6265-0193 メール info@nginet.or.jp

みんなのねがい 2025. 7 No.717
二〇二五年七月一日発行（毎月一日発行）
一九七一年四月三日 第三種郵便物認可
東京都新宿区山吹町四一七 新宿山吹町ビル五階 全障研出版部
定価715円（本体650円・税65円）

おいしいひととき

パンとコーヒーの香り

広島　九内康夫

「なんだかホッとする」がお店のコンセプトの「こねこね工房もみじ」は、広島の地にオープンして今年で15年目、今日も元気に営業しています。焼きたてパンとコーヒーのいい香りがお店のなかに広がります。

「ウインナーパン、焼きたてです！」焼き上がったパンを誇らしげにお店に並べていく仲間たち、イートインコーナーでは常連さんがコーヒーを飲みながら井戸端会議、今日もこんな日常が流れています。お店では自慢のパンに加え、もみじ福祉会で作っているクッキーやお煎餅、雑貨や小物なども販売しています。

これからも地域に親しまれるお店をめざしてがんばります。

雑誌 08441-07
4910084410755
00650